



Title	<書評>Kiyomi Ono, "Autobahn and Nazism : The Emergence of Landscape Ecology", Minerva Shobo (Kyoto), 2013
Author(s)	周, 雨霏
Citation	年報人間科学. 2015, 36, p. 191-195
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/51223
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

〈書評〉

Kiyomi Ono***Autobahn and Nazism: The Emergence of Landscape Ecology,***

Minerva Shobo (Kyoto), 2013

周 雨霏

冷戦体制が崩壊した後、エコロジーが世界共通の理念に成っている。「環境先進国」と呼ばれるドイツでは、そのエコロジーの理念は、遥かにナチ期において、目覚ましい発展を遂げていた。しかし、長い間、一部の例を除いて (Bramwell, 1985, 1992; Brüggemeier, Cioc & Zeller, 2005)、学界ではナチズムと緑という厄介な問題に向き合っていない状況が続いていた。大阪大学法学研究科で教鞭を執っていた小野清美氏は、本書『アウトバーンとナチズム』において、アウトバーン建設という第三帝国を代表する国家的プロジェクトを題材とし、その中心的な担い手たちの構想やナチ当局の自然認識の変化などを、より広範な政治的・思想的観点から考察することを通じて、ナチズムと自然保護、エコロジーの関係という未知であり、興味深い問題を多方面から考察している。筆者は、1996年に『テクノクラートの世界とナチズム：「近代超克」のユートピア』を出版している。その本では、ナチズムに統合されたテクノクラートの歴史、及び彼らの「近代超克」を中心に論じている。それに対し、本書では一転、「ナチスと緑」という、新鮮な問題に取り組み始めたのである。この問題を中心に据えた筆者の問題意識は、それぞれの立場に立っている諸アクターが抱く自然認識と実践にとどまらず、ナチ・イデオロギーが内包しているロマン主義的な自然観とエコロジーの内面的な連結にも議論が及び、そして、環境保護、人間と自然の調和的共存について、ナチスが残した正と負の遺産を批判的に再検討しているのである。以下、若干のコメントを加えながら内容を要約してみたい。

19世紀末に、急激な工業化や都市化による人口移動と社会問題の深刻化、文化と民族の衰退の危機感、及び文明ペシミズムが西欧各国で蔓延していたことは周知の事実である。当時、文明化によって脅かされるドイツ民族性を擁護しようとする急進的な民族至高主義運動 (völkische Bewegung) とともに、菜食運動、節酒運動、禁煙運動自然療法、裸体運動、ワンダーフォーゲルなど、いずれも「自然」に近い「生」に問題解決を求める諸運動が一齐に現れた。本書の第一章において描かれているのは、アウトバーン建設が開始された以前、「郷土」と「民族」いう概念の意義が劇的に増大していくにつれて、ドイツ社会における自然観が変容していた経緯である。1904年3月に、「ドイツの郷土の自然的、歴史的に発展してきた特性」(p. 47) を維持するため、郷土保護同盟が成立し、天然記念物や建築様式の保護、民族芸術、衣装保護などが掲げられた。筆者は、ナチス権力掌握の直後、動物屠殺に関する法律 (1933年4月)、森林荒廃防止

法（1934年1月）、帝国自然保護法（1935年6月）といった一連の自然保護関係の法律が他の人種主義的諸法と同時期に制定されたことには明確な関連性があると指摘している（p. 68）。ここで著者はナチ期の「緑の歴史」における位置づけに対して、「連続」か「断絶」かという硬直した図式に陥らず、世紀末から第三帝国までのドイツにおける「郷土愛」と「人種衛生」の関係を総体として描く「道」を求め、さらに、横軸で同時期の他の西欧各国では見られなかった自然保護のブームがナチドイツで巻き起こされたことに注目している。

第二章と第三章は、「ドイツ道路制度総監」であり、後に軍需大臣を務めたフリッツ・トット（1891-1942）の個人史・思想史と、ナチス政治の美学化の中で「ドイツ技術理念」が持つ文化ミッションという2つのテーマから構成される。ヴィルヘルム時代に南ドイツの小ブルジョア家庭に生まれたトットは、エンジニアの社会的承認と権力志望に応えるナチ体制の中で、経営と行政における影響力を獲得できたテクノクラートの代表的な人物と言えよう。トットが主張している「技術の利己的な立場からの決別、国民社会主義の志操を全技術に貫徹させるべき」（p. 92）というテクノクラートの思考は、明らかに大ゲルマン帝国の建設とドイツ文化・民族共同体の実現を前提として、「民族への奉仕、文化価値の創造」（p. 100）を標榜するものである。そのような文化政策への傾向は、「美」を重要な政治的範疇とするナチ・イデオロギーと合致していたため、アウトバーン建設の展開とそれに伴う景観工学の成立において、決定的な役割を演じるようになった。1933年8月25日「ライヒスアウトバーン協会」が設立され、「ドイツ道路制度総監」を務めていたトットの管理のもとで、道路建設は1934年の春から本格的に開始された。建設が中止された1941年末までに、全国で開通された総距離は3900キロであった。トットが1932年に公布した『褐色の覚書』（Braune Schrift）の提言によると、アウトバーン建設は国土防衛や交通整備の意義をもつ上、モータリゼーションの刺激及び60万人の雇用創出が期待された。しかし、当初の狙いとは反して、アウトバーンへの過剰投資及びフォルクスワーゲン計画の挫折により、当初予期された国民経済上や軍事上の機能を果たせなかった。ところが、ナチの美的政治の文脈の中で捉えると、様相が一変した。なぜなら、アウトバーンは「距離を克服し、民族同胞に民族の土地（Volksboden）を一層広く深く開き、ドイツのラントやガウを、部族と部族を、大都市と小都市を、都市と農村を相互に結びつける素晴らしい景観諸空間を走り抜けることによって、政治的に勝ち取られたライヒ統一が内面的な体験となる」（p. 133）から、社会にあたえた影響は実に大きいと言わなければならない。つまり、アウトバーン建設はナチの「美的政治」において、自然、技術、人間、文化を融合させる総合的事業として捉えられることができる。著者は、アウトバーン建設と挑発的攻撃的な技術主義を区別して、前者を「世紀末以来のネオ・ロマン主義的な自然賛美や生活改革運動」（p. 141）の延長線上に位置づけ、当プロジェクトが孕んでいる「スローダウンと融和、調和とホーリズムの美学」（p. 142）において現代的なエコロジー意識が生み出されたと指摘した。

アウトバーン建設における景観形成及び景観保護のため、1934年からアルヴィン・ザイフェルト（1890-1972）を含む8人の「景観代理人」（Landschaftsanwalt）が任命された。第四章では、郷土保護運

動派に属する景観代理人と文化政治的目標を掲げるテクノクラートの対立や齟齬の中で、アウトバーン景観美学は徐々に形成されてきた歩みが記されている。「美的改革者」である景観代理人のエコロジー思想が、主にザイフェルトがいう「景観の中へ建造物の違和感なき埋め込み」(p. 153)で現れ、アウトバーンの場合には、彼らは景観的、植物社会学的観点から生命あるものを配慮し、文化的、美的な点で景観毀損がもっとも少ない方法を模索する使命が与えられた。実践上、道路のルートや植栽に関して、「郷土への忠誠」にこだわる景観代理人たちが「強い支配意志を象徴する」(p. 166)直線ルートを拒否し、道路両脇の周辺にあるマント群落や表土を確保しようとした。しかし、この態度は、自動車道路の偉大さと立派さを目指したエンジニアたちの意に反するものであった。最終的に、双方が交渉・妥協している中で、生物工学、人智学、バイオダイナミック農法、BD農法など現代的なエコロジー的認識をもつ分野が著しい発展を遂げたのである。著者によれば、エコロジー化の推進は一部のナチ指導者のプラグマティックな目的、すなわち、社会ダーウィニズム的闘争を戦いぬくべき人種の健康を維持するための手段に過ぎず、彼らの自然認識は、自然世界における生命循環、生命共同体とその構成要素の相互作用を決定的に重視する自然観とは思想的親近性や共通性をもつとは言い難い(p. 204)。ともあれ、アウトバーン建設における景観修復、育成の問題を巡るコンフリクトによって、ドイツ歴史上初めて建造物の景観への組み込みが広範な規模で組織され、世紀末の郷土保護運動の自然観に基づく生命循環、生命多様性と持続可能な発展を鍵とする現代的なエコロジー的観点が打ち出されたのは事実である(p. 224)。

それと同時に、1934年5月にアメリカの広範囲で前例のない「砂嵐」が発生し、欧米諸国において、自然と気候をめぐる危機意識が大幅に向上した。ザイフェルトは「ドイツのステップ化」(Die Versteppung Deutschlands)を題名とする講演で、ドイツで行われていたダム建設や河川規制、土地改良事業が、土壌水や地下水の状況悪化や、降水量と気候の変化など「ドイツの自殺的なステップ化」をもたらすと指摘し、自然の関連を慎重に考慮して開発が行われるような枠組みの制定を要請した。それをきっかけに、1936年から1938年にかけて、多数の気象学者、地理学者、将校、農民指導者の間で「ステップ化論争」が引き起こされた。トットらはザイフェルトの警告を「宇宙的、形而上学的な思想」(p. 257)と揶揄して、技術と自然の調和は最大限の努力によって達成できるという楽観的な技術論の立場に立っていた。だが、論争が深化していく中で、ナチ当局は政策制定において、理論的にザイフェルトの主張を大幅に受容し、河川流路矯正に関して、沿岸植物の保護、鳥や魚類の生活空間や景観との調和、運河堤防の防風植栽、表土と芝生の扱いなどを徐々に配慮するようになったと見える。しかし、著者が指摘したように、ナチの自然観とザイフェルトの自然観は決して同質的なものではない。ザイフェルトが「Das Leben」(生命)の代わりに「Das Lebendige」(生き生きしたもの)という語を用い、自然界を「多様な生きものが相互に関係するネットワーク」、「変化しつつも多様な姿で他のものとの相互作用と調和・均衡の中に存在する、完結した有機体」(p.275)として捉え、ナチスのダーウィニズム的自然観や優生学的人種主義を明白に批判した(p. 284)。だが、ザイフェルトは生命的自然への愛を抱いているとは言え、「普遍的人間性」(p. 278)の認識が欠如していることにより、一種の民族共同体への志向を持ち、「生命の時代」という幻想を後に

ナチ体制の中で追求することに至った (p. 279)。

1939年9月、ポーランド占領とともに、ヒムラー主導の「東方ゲルマン計画」の構想が本格的に始まった。東部入植におけるドイツ人の定住を可能にするため、景観のゲルマン化が重要な課題となった。第六章では、東部景観のゲルマン化において、上述した自然認識とエコロジー思想が受容されている経緯が描かれている。ザイフェルトが1939年に東部景観のゲルマン化に関して、灌木と樹木の混成、道脇の植栽の重視、防風や降水量を維持するための生け垣景観形成など、「最高の美と最高の収穫」(p. 298)を目指す提案を表明し、当局の公的なプランを表す「全般的指示」に大きな影響を与えたように見える。それと同時に、彼自身はヒムラーの協力への要請を拒否したが、東部に開けた展望に大きな期待をもち、ゲルマン農民が創出した生け垣景観の再建によって、全ドイツを「一つの大きな庭」にするように呼びかけた。著者によると、アウトバーン建設時期における技術と自然の融和への追求と比べて、ザイフェルトは当時、明らかに東方景観ゲルマン化という妄想のような計画に大いに刺激され、「偉大な北方諸民族＝農民民族」及び保守的な「血と土」というナチ的イデオロギーに陥っており、ナチの人種主義に無批判的になってしまったということである (p. 332)。

このように、世紀末の郷土保護運動から北米の砂嵐を機に生態学への転換と自然保護のエコロジー化の流れが明らかになり、ナチ期はドイツ環境保護運動の発展史において、鍵的な位置を占めていることが終章で総括される。つまり、生存闘争による生命の浄化を核心とするナチズムの「生命法則」は、人間と他の被造物を同じ自然的生命体に還元する側面を持っている。それこそ、ナチ・イデオロギーの野蛮なダーウィニズム的自然観と有機的自然観が矛盾なく相互関連される鍵となった。ナチズムの自然観は緑の陣営が唱えている調和と相互依存を重視する審美的自然観と一致するわけではないが、ナチ期においてプラグマティックな目的で萌芽したエコロジー的環境保全への志向が、戦後の環境運動へのポジティブな連続性をもつことも否めない。(p. 368)

こうして各章のポイントを粗描したかぎりでも明らかのように、本書では、政治的決断、思想的葛藤、実践上の結果といった複数の次元から、極めて複雑な絡み合う関係の中で形成しつつあったナチ期の景観美学の立体的全体像が描かれている。そのこと自体、すでに大きな魅力といえるが、本書のインパクトは無論そのことには尽きない。例えば、「ステップ化論争」を巡って、著者が様々な立場におけるナチ幹部たちの発言と当局の食糧・農業省の回覧公報を綿密に読み解くことを通じて、ナチ当局のザイフェルトの警告に対する態度が柔軟に変化していき、彼の主張を受け入れた経緯を複数の次元からアプローチした。それは政策思想と現実の相互作用を考える上で示唆的といえる。また、著者のナチ期に起こった自然保護ブームの究極的原因を大衆思想の動きの中で見出そうとする試みが刺激的である。つまり、エコロジー意識が芽を出した思想・文化的基盤は自然・郷土保護運動に大いに影響されたワイマール教養市民層が抱いていたロマン主義的自然観である。このような理解を踏まえると、ナチ期はドイツの20世紀における自

然保護とエコロジー史のなかで枢要な時期と位置付けられるようになる。ナチ・イデオロギーが孕んでいる「アンビバレントな可能性」に関心ある方に、是非一読をお勧めしたい。